

開講の趣旨



愛知県知事
大村 秀章

経済活動や日常生活による環境への負荷の増大や天然資源の枯渇などが懸念される今日、社会全体の仕組みを見直し、持続可能な社会を形成していくことが私たちの重要な課題となっています。

私たちの求める持続可能な社会は、環境と産業と暮らしが調和するとともに、快適かつ安心であり続けることのできる社会であり、そのためには、地域の住民や企業、行政などが協働して社会の仕組みを創り変えていくことが求められます。

本県は、モノづくりの地域として様々な産業技術の集積が存在すると同時に、我が国有数の農業県であり、さらには豊かな海や森林が広がるなど、多種多様な資源を持つ地域です。持続可能な社会づくりは、これらの“資源”を大いに活用して進めていくことが必要ですが、そのためには、“ビジョン”と“こころざし”を持つ人材を育成することが何よりも大切です。

こうした考えのもと、本県では、企業や大学、行政などといった様々な分野において、環境を基調とした地域づくりのリーダーの育成を目指して「あいち環境塾」を開講しております。

この「あいち環境塾」では、講師陣に企業、大学などの分野で活躍する第一線の研究者、指導者を迎えています。そして、講義に加え、講師も加わった討論や合宿などを通して、互いに切磋琢磨し、目標を共有する仲間づくりができるようなクリエイティブな場とすることを目指しています。

本県で、環境、産業、暮らしにおける持続可能性が高まり、さらにより良い地域へと生まれ変わっていくために、そして我が国全体を持続可能な社会としていくために、「あいち環境塾」への皆様のご参加をお待ちします。

2015年3月

あいち環境塾の特色

1 「環境」を多角的に学び、「統合」をめざす「塾」

企業の取組であっても、行政の取組であっても、環境のプロジェクトやビジネスを実現し成功させていくためには、地球環境や社会全体に与える影響を考えることが必要です。環境に一人勝ちはありません。良いプロジェクトを企画するためには、企画者自身が環境について様々な視点から多角的に学び、それらを統合して利害関係者に働きかける、大きな発想が求められます。「あいち環境塾」は、このような「統合」をしていただけるような場を目指します。

◎最終日は「1泊2日の合宿」で、ビジネスモデルや政策を提言

塾生には、塾期間中を通してチームで「2030年の未来社会へ向けての環境に関するビジネスモデルや政策」づくりに取り組んでいただきます。最終日の成果発表会で、チームごとに愛知県にビジネスモデルや政策を提言していただきます。

◎ネットワークの構築

塾が終了すると、自然に塾生同士、チューター、卒業生、講師とのネットワークが築かれています。このネットワークを築くことも「塾」の目的です。



2 こころざしを持った人材が集う「塾」

「あいち環境塾」は、企業や大学、行政などで「環境」の実務や研究に携わり、持続可能な社会づくりの“こころざし”を持つ方々が集い、自らが積極的に学び、意見を交わすことを通じて、互いの視野を拡げ、分野を越えた協働の可能性を発見する、交流の場となることを目指しています。

3 各分野の第一人者と対話ができる「塾」

「あいち環境塾」の講師陣には、エネルギー、環境技術、資源循環、環境ビジネスなど、関連分野における我が国の第一人者を招聘します。参加者は、講義を受けるだけでなく、丸一日、講師と時間を共にして意見を交わし、理解を深めることができます。

あいち環境塾のメンバー

塾長



愛知県副知事
森岡 仙太

顧問



名古屋大学
大学院工学研究科
教授
(公財)名古屋産業科学研究所
理事・副所長
鈴木 保雄

プログラム・コーディネーター



「あいち環境塾」の講座プログラムを提案・改善していくため、プログラム・コーディネーターを依頼しています。
トヨタ自動車株式会社
第1トヨタ企画部 部長
(H27.4.1~)
近藤 元博氏

主な講師陣



東京工業大学
特命教授
柏木 孝夫氏



(公財)廃棄物・3R研究財団
理事長
岡山大学 名誉教授
田中 勝氏



京都大学
大学院経済学研究科
教授
植田 和弘氏

日本のエネルギー戦略と今後

エネルギー基本計画に基づき、本年からベストミックスの審議が始まりました。原子力代替をどうするか？再生可能エネルギーに対する光と影等、最新の政策状況を述べると共に、低炭素型エネルギーシステムの実現に向けた動きにも言及する。更に、化石燃料の高度利用に對しとらわれている最新の政策動向を述べ、今後の展望を試みる。循環型社会の構築を含め、21世紀の我が国の成長エンジンは低炭素エコノミーをいち早く実現する事にある。共に考えたい。



東北大学
大学院生命科学研究科
教授
中静 透氏



南山大学
経営学部経営学科
准教授
川北 眞紀子氏

私たちの生活を支える生物多様性

生物多様性の問題は、絶滅危惧種や外来種の問題だけだと思われがちです。しかし、生物多様性なしでは私たちの生活は成り立たず、これをどう上手に利用するかが私たちの社会の持続性を大きく左右します。私たちの生活が、生きものたちのネットワークによって支えられていることを意識して、賢い利用の仕方を考えたいものです。



横浜国立大学
名誉教授
浦野 紘平氏



東京工科大学
大学院アントレプレナー専攻
教授
(H27.4.1~神戸大学大学)
院経営学研究科 教授
尾崎 弘之氏

化学物質の有害性およびリスクとその管理

化学物質の急速な普及によって、現在の私たちの生活は、人類が経験したことのない「化学物質の海を泳いでいるような生活」になっている。化学物質による被害事例にはどのようなものがあるのか、化学物質の有害性はどのように評価されているのか、そのリスクはどのように管理されているのかなどを紹介し、今後どうすべきかを考えたい。

環境ビジネスはいかに成長戦略に貢献するか

環境省の調査によると、国内環境産業の市場規模は86兆円に上り、243万人の雇用を生んでいます(いずれも2012年)。特筆されるのは、「地球温暖化対策」関連の市場は過去10年間で4倍以上に急成長していることです。低成長に苦しむ日本経済にとって、再生可能エネルギー、低燃費自動車、省エネ、蓄電池などは、大きなポテンシャルを持つといえます。グローバル市場においても、環境・エネルギーのベンチャーはITやバイオと並ぶ重要な分野へと成長しつつあります。新しい事業の開拓には、ベンチャービジネスの仕組みを知る必要があります。起業家の視点で、どのように環境ビジネスを推進するか、活発な議論を期待します。

持続可能な発展とは何か

持続可能な発展(sustainable development)は環境と開発の問題を考える際のキーワードであるが、必ずしもその定義や内容に関して明確な定義があるわけではない。そのため、枕詞としては使われるけれども、政策的な操作可能性は期待されたほど十分なものではなかった。この講義では、そもそもdevelopmentとは何かということから再検討し、持続可能な発展論の意義と課題を明らかにしたい。



(株)ユニバーサルデザイン
総合研究所
所長
赤池 学氏

戦略PRを通じて環境への取り組みを考える

素晴らしい取り組みであっても、世間にあまり知られていないことはよくあります。人々に関心を持ってもらうためには、様々なメディアを通じてアピールしていくことは重要な活動です。そのために、人々にとっての価値、社会的な意義といった視点を通して自社の取り組みを再定義することが必要になってきます。社会への情報発信のあり方を、様々な視点から考えてみましょう。

自然に学ぶ科学技術

あいち環境塾では、「自然に学ぶ科学技術」をテーマに、今、喧伝されている低炭素対応は、あくまでも「生物多様性社会づくり」の一段に過ぎないこと、「キズデザイン」や「感性価値」の開発が、サステイナブルデザインに発展すること、この二点を提起しながら、持続可能な科学技術の可能性についてお話しします。蝶が舞い飛び、鳥たちが囀る環境に、人はなぜ、心惹かれるのか。それは、風景としての美しさではなく、生物としての人間が、五感と心、そして本能のレベルで、「サバイバリティ」を直感しているからではないでしょうか。効率や定量的なエビデンスだけでは語れない環境対応の大切さについて、塾生の皆様と共に考えてみたいと思います。



中日新聞社
論説委員
飯尾 歩氏

環境ってなんだらう？—メディアから

環境って… 初めは「けしからん」から始まりました。瀬戸内海の小さな島で展開された大規模な産廃不法投棄事件についてです。かれこれ20年、日本中を取材しています。水俣病患者の緒方正人さんがつぶやいた「チッソは私自身であった」という謎めいた言葉が忘れられません。なぜ、患者が公害被害者に自らに重ね合わせねばならないか。福島原発事故で全村避難を余儀なくされた飯館村の荒れ果てた田んぼの風景が頭から離れません。環境は与えられたものではなく、私自身がつくるもの。「環境って何だろう?」。かれこれ二十年、自分自身に問い続けています。みなさん、一緒に考えてもらえませんか。お願いします。